

多世代で子育てするまちづくり ——のざわテットーひろば 18年のあゆみ——

石原 遼

(NPO 法人野沢 3 丁目遊び場づくりの会・プレーリーダー)

1. はじめに

(1) のざわテットーひろばとは

東京都世田谷区の東南部、目黒区との区界に位置する野沢地区に、のざわテットーひろばがある。「地域みんなで子育てしよう」「子どもたちにもっと自由な遊び場を」という地域住民の思いで開放された私有地を利用して、2002年4月に開設された。運営は、NPO 法人野沢 3 丁目遊び場づくりの会が行っている。

世田谷区地域子育て支援拠点事業「おでかけひろば」として、またプレーパーク（冒険遊び場）として地域に開かれ、乳幼児を中心とした異年齢の子どもが「遊び」を通して関わりあい、豊かな経験を重ねながら生き活きと育ちゆく姿を、親だけではない多世代の大人が見守っている。

のざわテットーひろばは幅 10m×奥行き 50m の細長い敷地で、入口からは舗装された地面が続く。地域の造園屋さんが手入れをしてくれる藤棚は、夏には緑葉が生い茂り心地よい木陰をつくる。落葉する冬にはひなたぼっこに最適な暖かい空間ができる。その下には 20 畳のウッドデッキが広がり、おままごとなどの遊びを通して、親子のゆるやかなふれあいがある。

敷地の中央には「みどりのやね」と呼ばれる小さな家があり、室内で絵本を読んだり、お昼寝をしたり、乳児対象のベビーマッサージを行ったりしている。裏庭に面してウッドデッキが続き、外遊びする子どもを見守る大人の憩いの場となっている。室内では、親同士の賑やかな会話が絶えない。

敷地の奥には土のひろばが広がり、水、土、木などの自然の素材や子どもの成長にあわせた手作り遊具などで遊べる。子どもの「やってみよう」という遊びが自由にでき、裸足で駆け回る姿が季節を問わず見られる。そんな光景は、かつて都市部にも広がっていた遊び場の姿だろう。

大きく 3 つのエリアに分かれている敷地は、それぞれのエリアで展開する遊びが異なるだけでなく、子どもの成長にあわせて、遊びのエリアが敷地の奥へと少しずつ広がっていくことも特徴的である。



(写真上) のざわテットーひろば外観。白い鉄塔が目印になる

(写真下) 土のひろばは季節を問わず、子どもたちのさまざまな遊びが広がる

活動報告

(2) プレーパークとは

「プレーパーク（冒険遊び場）」は全国的にはまだ認知度が低い言葉であるが、世田谷区内においては多くの方が見聞きしたことがあるだろう。

プレーパークの源流は、1943年、デンマーク・コペンハーゲンの郊外に誕生した「エンドラップ廃材遊び場」である。造園家のソーレンセン教授による「子どもは、大人が作ったお仕着せの遊び場より、危ないからダメと禁止される廃材や資材置き場の方がいきいきと遊ぶのではないか」という発想から生まれた。

欧米諸国でのプレーパークの取り組みを知った大村虔一・璋子夫妻（当時、世田谷区経堂在住）は、「わが子の遊び環境は自分たちの子ども時代とは違っている。わが子にもあの遊びの世界を体験させてあげたい」という思いから、1975年から数年間、地域住民による遊び場づくりを試験的に進めていった。1979年、常設の冒険遊び場「羽根木プレーパーク」が開園して以来、全国各地に406箇所のプレーパークが存在している（2016年度現在）。

プレーパークとは、「自分自身が『やってみよう』と思うことを表現できる場所」である。自分の内側から湧き上がる『やってみよう』という気持ちを行動に移すことが「遊び」であり、その「遊び」が生まれる場所こそがプレーパークである。子どもによってさまざまな遊びが展開されていくので、変化しつづける遊び場ともいえる。禁止事項を出来る限り作らず、自ら「遊び」を考え、創造していく経験は、子どもの生きる力を育むことにつながると考えている。



(写真) 羽根木プレーパーク

※出典：NPO 法人日本冒険遊び場づくり協会
WEB ページより

(3) プレーリーダーとは

プレーパークには、「プレーリーダー」や「プレーワーカー」と呼ばれる人が常駐しており、のざわテットーひろばもその1つである。

プレーリーダーの役割とは、「子どもがいきいきと遊ぶことのできる環境をつくること」である。具体的には、子どもが「やってみよう」と思う遊びの見守り、状況に応じた声掛け、遊びの中で起こりうるトラブルへの対処、遊びの素材・道具の準備や手入れ、遊具の点検・修繕、遊び場全体の安全管理など多岐にわたる。子どもの遊びを主導するのではなく、彼らの気持ちを応援し発展させていく立場である。

その中でも、のざわテットーひろばのプレーリーダーとしての重要な役割は、人と人をつなぐことである。来園した親子とのコミュニケーションは欠かせず、おしゃべりしながら自然な支えあいをコーディネートしていく。「地域 みんなで子育てしよう」という活動理念のもと、皆で気持ち良く運営できるように一緒に考えながら日々取り組んでいる。

(4) 子育て支援とは

のざわテットーひろばは、プレーパークだけでなく、地域子育て支援拠点施設の機能も有する。地域子育て支援拠点施設とは、子育て中の親子が気軽に集い、相互交流や子育ての不安・悩みを相談できる場であり、世田谷区には「おでかけひろば」という名称で、区内 34 箇所の施設が点在している（2019 年度現在）。

のざわテットーひろばにおける子育て支援は、主に、親の居場所づくり、子育て当事者の関係づくりなどである。

「親の居場所づくり」とは、日々子育てに奮闘する親たちにはっとひと息つける居場所を提供し、子どもを他の親や地域の大人とともに見守る機会をつくることである。親子の濃密な関係性であるがゆえに、時には息詰まる事もある。子どもとの距離を少し置き、間に第三の大人が関わることで、親自身がりフレッシュでき、新たな気持ちで子育てに向き合うことができる。閉鎖された家の中とは違った環境、微妙な距離の変化が、普段見過ごしていたわが子の長所や心身の成長について、新たな気づきをもたらすきっかけにもなる。

「子育て当事者の関係づくり」とは、コミュニケーションをとおして、人と人、人と遊び、人と場をつなげることである。例えば、初めて遊びに来た親子と常連の親子の会話のきっかけをつくったり、悩みを抱える親を専門機関や地域の支援団体につなげたりすることが挙げられる。昨今、“孤育て”と言われるように、少子高齢化、核家族化などを背景に子育て当事者同士の関係が希薄になっている。多世代間の交流や顔の見える関係を築いていくことで、子育て当事者同士が支えあうネットワークが生まれていく。

2. のざわテットーひろばの変遷

(1) 地域住民の思いから始まった遊び場づくり

のざわテットーひろばのある土地は、以前、造園会社の資材置き場として利用されていた。2000 年、4 階建てワンルームマンションの建設計画が持ち上がり、周辺住民が反対運動を起こしたことを受け、隣に住む山縣恒子さん（のざわテットーひろばの大家）が土地を買い取ったことに端を発する。

買い取った土地を地域のために活用できる方法を模索する中で、プレーパークの取り組みを紹介する新聞記事に目が留まり、国分寺市プレイステーションを見学しに行った。その後、冒険遊び場情報室（現在の NPO 法人日本冒険遊び場づくり協会）へ遊び場づくりの相談をもちかけ、助言を受けつつ、低年齢の子どもを対象にした遊び場づくりが始まった。

遊び場運営を地域住民へと呼びかけている際、「マンマとプチ・グランマ」という子育て支援団体と出会い、ともに遊び場の立ち上げに取り組むこととなった。2002 年 1 月、任意団体「野沢 3 丁目遊び場づくりの会」



(写真) 造園会社の資材置き場時代の現地

活動報告

を設立し、初代代表に池田栄子が就任した。

そして2002年4月、のざわテットーひろばは産声をあげた。開園当初は、入園時期の子どもをもつ子育て当事者と子育て支援者により構成され、開園日を毎週水曜日に設定した。また、「みどりのやね」に事務局を置くことになった冒険遊び場情報室の局員が、日々の開閉園作業や遊具等の管理を担ってくれた。

このように、のざわテットーひろばはさまざまなご縁のもとで始まった遊び場である。

(2) 活動基盤を形成した「世田谷まちづくりファンド」

週1日の開園で始まったのざわテットーひろばだが、当時は敷地の中央に真新しい建物がポツンとあるだけで、周囲は野原のような場所だった。備品や遊具をもっと増やしていきたい、場づくりをしていくプレーリーダーがほしいなど持続可能な運営への思いは強まる一方、当時は基盤づくりをするほどの資金はなく、その望みを助成金につなげた。

2002年度からの3年間、世田谷まちづくりファンド・まちづくり活動部門助成を受け、遊び場で使用する道具箱、木材・ペンキなどの資材、室内の本棚などを揃えた。また、2003年8月より毎週水曜・土曜日の週2日開園となり、常駐のプレーリーダー1名を置いた。

2007年度からの2年間は、世田谷まちづくりファンド・まちを元気にする拠点部門助成を受け、これまで「みどりのやね」にあったトイレを屋外に移設し、屋内から半屋外のテラスへ移動できるよう整備した。2ヶ年計画の1年目は建築家と協力して調査準備費用として申請し、2年目に施工・完成した。この整備によって、屋内・半屋外(テラス)・屋外のつながりが改善され、風が吹き抜ける気持ちの良い空間になった。

2002年度からの延べ5年間、世田谷まちづくりファンドの助成を受けたことで活動基盤は強化され、のざわテットーひろばの黎明期を支えた。「世田谷まちづくりファンドが考える“まちづくり”に、のざわテットーひろばの活動がぴったり合っていた」と池田は振り返る。



(写真) のざわテットーひろば開園当時の土のひろば

(3) 場を運営していくための資金集め

遊び場の運営を継続させていくための資金繰りは試行錯誤の連続だった。17年間の活動の中で印象に残る苦難や葛藤は何かという問いに対し、のざわテットーひろばの開園から運営に携わる広吉敦子、塚本重美は、「どうしたらお金が集まるのか。助成金の申請をするために書類を作成して、期限までに提出して、落選したものもあって、その繰り返しだった」と口を揃える。

前述の世田谷まちづくりファンドの他に、世田谷区社会福祉協議会、ニッセイ財団などの助成を受け、場づくりに活かしていった。これまでに受けた主な助成金とその用途内容を下表に付する。

(表) これまで受けた主な助成金とその用途

年度	助成・受託事業名 / 用途内容
2002～	<u>世田谷区社会福祉協議会 子育て支援サロン補助</u> 子育て中の母親たちが気軽に集まっておしゃべりできる機会を提供しようと、イベントなど、日常の活動の中に織り交ぜて実施した。
2002～2004	<u>世田谷まちづくりファンド まちづくり活動部門助成</u> 遊び場で使用する基本的な道具箱、木材・ペンキなどの資材、室内の本棚などを揃えた。その後、プレーリーダー人件費が認められ、週 1～2 日の活動日にプレーリーダーを配置した。
2005～2006	<u>世田谷区社会福祉協議会 地域の支え合い活動助成</u> 来園者の若い母親たちを中心に地域取材し、「子育てマップ・ふれあいマップ」を作成した。また、これまでの活動記録をまとめた「3 年間の記念誌」も作成し、あわせて配布した。
2005～2007	<u>世田谷区 自然体験遊び場モデル事業受託</u> 世田谷区の新たな事業である「自然体験遊び場モデル事業」の委託を受け、週 2 日の活動日にプレーリーダーを配置した。世田谷区が子ども施策を整理する 2007 年度まで 3 年間受託した。
2007～2008	<u>世田谷まちづくりファンド まちを元気にする拠点部門助成</u> トイレとテラスの整備を目的として、初期段階から建築家と協力して調査準備費用により申請案を作成。2008 年度に施工した。
2007	<u>ニッセイ財団 放課後の子どもの居場所づくり事業助成</u> 手作りの石窯やそれを利用したイベント等を実施した。
2007	<u>東京マイユープ 市民活動助成基金</u> 藤棚下の 20 畳のウッドデッキと土のひろばへ通じる木道を整備した。ベビーカーなどでも利用しやすい状況をつくることができた。
2008	<u>SAHS 地域のトイレを増やそうプロジェクト</u> トイレ整備に際してユニバーサルデザインとすることで、SAHS（世田谷オルタナティブ・ハウジング・サポート）の「地域のトイレを増やそうプロジェクト」に位置づけられ、募金から助成を受けた。
2009	<u>世田谷まちづくりファンド まちづくりネット文庫部門助成</u> のざわテットーひろばの開園以来の経緯、活動から得られた経験や知見、スキル等をまとめ電子図書を発行した。
2012	<u>認定 NPO 法人サービスグラント プロボノプログラム助成</u> のざわテットーひろばホームページをリニューアルした。
2015	<u>世田谷区子ども基金助成</u> 有志活動「こめつ部」が企画する、1 年間のお米づくり体験プログラムを行った。

活動報告

世田谷まちづくりファンドによる最初の3年間の助成が終わった後、継続的な財源確保として会員制度のしくみを整えた。ささえ手会員（運営会員）、気持ちささえ手会員（賛助会員）を設け、地域住民や来園者から財政面で支援してもらう体制をとるとともに団体規約を発効した。

また、資金集めの目的もあり、2002年5月からは「テットーバザー」が始まった。地域住民や来園者から寄贈された品々を販売し、その収益を運営費に充てた。子どもの衣類やおもちゃを介して人と人、場と地域がつながっていくこのイベントは、第1回の開催以降、現在も貴重な財源として春と秋に開催している。

（4）週5日開園とNPO法人格の取得

2007年4月、おでかけひろば事業の認定をめざし、開園日を週2日から週5日に変える大きな決断をした。その結果、10月にはおでかけひろば事業として認定された。それにより、パソコンや電話等の備品を揃え、プレーリーダーの他にスタッフを配置し、2名のスタッフが常駐する体制をとることができた。

2009年度以降は継続的におでかけひろば事業として運営していく見込みがあったため、運営体制の整備を検討し、2010年2月にNPO法人格を取得した。これまでの実践の積み重ねにより、安定した運営ができるようになった。

2019年度現在、運営会員は34名、そのうち14名のスタッフが交替で当番に入り、プレーリーダーとともに来園者を迎えている。来園者から運営側へという誰もが運営に参加できるスタイルのもと、テットーひろばの運営は、子育て真最中あるいは子育てが終わった親を中心とした地域の大人によって行われてきたのである。

3. これまでの主な取り組み

（1）食育

のぞわテットーひろばでは、イベントなどを通じて食べ物に関わることを大切にしている。大家である山縣恒子さんの「食べることは生きることの根幹である」という思いのもと、「みどりのやね」にはキッチンが併設されている。

また、「果物や野菜が育つ様子を子どもたちに知ってほしい」という思いから、テットーひろばには、ウメ、ビワ、ミカン、カキ、レモンなどの実のなる木が数多く植えられている。ウメは収穫後にシロップを作り、夏にジュースやかき氷として好評を得ている。

2004年には気まぐれテットーカフェが始まった。はじめは、古賀久貴さん（当時、NPO法人日本冒険遊び場づくり協会事務局長）がお母さんにかけた「コーヒー淹れるけど一緒に飲みませんか？」という何気ない一言だった。「子育てや毎日の生活で疲れている親たちの安らぎのひとつになれば」という思いのもと、スタッフの原田治子が主宰し、週2日のカフェタイムを設けた。現在は、1杯100円のコーヒー・紅茶の提供を毎日行



（写真）金曜日に行っているランチは、食をとおして人と人がつながっていく

うほか、スイーツの販売やランチの提供を週1回、親子クッキングを月1回行い、親子で食を楽しむ機会をつくっている。

子どもが元気に過ごすためには親が元気でなければならない。テットーひろばにおける食は、親が日々の子育てからしばし解放され、ひと息つくことができる「親支援」の大切な要素でもある。

（２）来園者主体の活動

のぞわテットーひろばには、「こんなことをしてみたい」という思いをもつ人が多く集まる。アイデアは月例ミーティングで話し合いながら、講座やイベント、日常的な有志活動として実現していく。

2015年、都会で暮らす子どもたちにお米作りを体験してもらいたい、という思いのもと「こめつ部」という有志活動が始まった。千葉県富津市にある田んぼを利用して、田植え・草取り・稲刈りのプロセスを稲の生長とともに楽しみ、実際に身体を動かして農家さんの苦勞を知るところを1年間のプログラムとして行った。この活動は世田谷区子ども基金の助成を受けて実施したが、主宰した1人は「のぞわテットーひろばが拠点だったから出来たことだ」と振り返る。

食に関する有志活動としては、自然発生的に始まった「はたけ部」もある。「テットーにわには(野良仕事で遊んじゃおうの会)」(2008年度～)の活動を引き継ぎつつ、土のひろばの小脇で各種野菜の栽培やミニ田んぼでの米づくり、また染め遊びなどを通して、親子で土とのふれあいを楽しんでいる。近年は、地域住民から苗や肥料の提供や助言を受けながら、継続的に活動している。毎年秋に開催する「里芋掘りと芋煮会」は、のぞわテットーひろばの人気イベントの1つである。

2018年には、父親同士で子育ての話をする機会をつくりたいという思いから「おやじ部」が発足された。月1回、土曜日の閉園後の時間に対話会を行い、時には父であることの苦惱を吐露しながら、テーマを設けて対話を展開している。女性よりも自らの悩みや本音を語り合うことの少ない男性中心の場だからこそ得られる共感が、参加者の安心感や新たな気づきとなっている。

この他にもさまざまな例があるが、のぞわテットーひろばを自分の居場所としているからこそ、他の人たちとこの場を共有したいという思いが多様なアイデアを生み、継続的な活動につながっているのだと感じる。運営者と来園者が支援する・される関係性ではなく、ともに場づくりをしてい



(写真上) はたけ部による畑の土づくりは、子どもから大人まで楽しみながら行っている
(写真下) おやじ部による「子育てパパの対話会」は、参加者が円になって展開され、話は多岐にわたる

活動報告

く主体者であることが、のざわテットーひろばにおける最も重要な理念と実践のひとつである。

(3) 地域との連携・協働

遊び場づくりは地域の理解と支えがあってこそその活動である。のざわテットーひろばを始めるにあたっては、山縣恒子さん自ら近隣住民にアンケートをとり、要望や不安などを聞くことから始めた。初代代表を務めた池田も「一番大事なことは、近所の方たちに理解してもらうことだ」と語っている。よりよい遊び場づくりを進めていくには、地域住民と顔の見える関係性を築き、対話できる機会をつくっていくことが不可欠である。

のざわテットーひろばはさまざまな場面で地域との連携を模索し、児童館、プレーパーク、地域団体などが主催するイベントには積極的に参加してきた。特に地元町内会との関係づくりは意識的に取り組み、イベントへの参加はもちろん、消火器材であるスタンドパイプの設置場所として提供している。のざわテットーひろばのイベントを開催する折には、町内会の掲示板や回覧板で広報させてもらうなど情報交換を綿密に行っている。

2018年からは、世田谷区社会福祉協議会下馬・野沢地区事務局を中心に、児童館、おでかけひろば、子育てサロンなど、同地区を拠点に活動する子育て団体のネットワークが発足された。定期的な交流会を開催して情報交換を図るほか、協働イベントを開催している。また、子育て団体の広報を目的とした「下馬・野沢子育てマップ」を発行し、プレーリーダーがその作成・編集に関わった。この連携は、活動理念に沿った取り組みであるため、今後も継続的に関わり、積極的な協力関係を築いていきたい。



(写真) 下馬・野沢子育てマップ

4. おわりに

本来、子どもの遊びの拠点となるのは公園であるが、現代の子どもたちは禁止事項に縛られて思うように遊ぶことができない。また、「小学生が多く遊んでいる中で、幼い我が子を遊ばせるのは不安だ」という声も多く聞かれ、親子の公園離れが加速している。その一方で、乳幼児期からの外遊びの大切さをとらえ直す向きもある。

それらをふまえて、乳幼児に特化した遊び場づくりは大切であると考えている。子どもは生まれた瞬間から、風の流れ、草木のにおい、水や土の感触などさまざまな刺激を受けながら成長する。乳幼児期から外で遊ぶことで五感を駆使して季節の変化を感じ、仲間とつながり、協働しながら遊びを生み出していく。禁止事項を設けないことで子どもはさまざまな遊びに自由に挑戦でき、それが出来たときには達成感とともに自己肯定感も高まっていくだろう。また、子どもの成長は親の成長にもつながる。親子ともに遊びを通して挑戦し、失敗と成功を繰り返しながら過ごしていく日々はかけがえのない財産になるだろう。

2022年には、開園20周年を迎える。のざわテットーひろばのような、私有地を利用した子どもの遊び場、また、利用者と運営側が混ざり合い、子育て当事者同士が互いに支え合う仕組みは全国的にも稀少である。「外遊び」と「子育て」の二本柱からなり、親子それぞれの「やってみたい」ができる場所として、これからも地域とともに歩む場づくりをしていきたい。

[参考文献]

- ・野沢3丁目遊び場づくりの会（2005）「のざわテットーひろば3年間の記念誌」
- ・嶋村仁志（2005）『『遊び』を通して子どもに関わるということ ―冒険遊び場とプレーリーダー―』
駒澤大学教育学研究論集第21号
- ・NPO法人野沢3丁目遊び場づくりの会（2012）「のざわテットーひろば10周年記念誌」
- ・社会教育推進全国協議会東京23区支部（2018）「いま 知りたい 伝えたい ―東京23区の社会教育白書2018―」